



TITLE:

講演 洋醫消息

AUTHOR(S):

横田, 浩吉

CITATION:

横田, 浩吉. 講演 洋醫消息. 日本外科宝函 1932, 9(2): 348-355

ISSUE DATE:

1932-03-20

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/201752>

RIGHT:

演 講

息 消 醫 洋

京都府立醫科大學教授 醫學博士

述 吉 浩 田 横

私の洋行は期間が短かつたので見たところも少い上に、旅行の話は度々御聴きになつたでせうから、御興味は少いと思ひます。行きがけには私は印度洋を廻りまして Napoli に上陸し、伊太利を縦走して獨逸に参りました。それまで醫學に關することは抜きにしました。只だ Singapore で川口君を訪問致しました。川口君のゐる「Singapore 日本人病院」といふと、日本で云へば先づ小市の公立病院位で、患者は主に支那人です。手術室の設備も出來て居まして、手術は可成り多いそうです。同地には英國人が多いのですが、本當の金持は支那人ですから、排日騒ぎさへなければ病院の經營は容易な譯です。其處はどういふ關係かは知りませんが、骨及關節の結核が多いといふ事で、その他の病氣については異つた話を聞きました。

次に伊太利の到る所で跛者、矮人、佝僂が多いのが眼につきました。之は日本人の如く恥づかしがる事なく外出するから目立つのかも知れませんが、獨佛國にも澤山あつた様に思ひます。

München で *Lexer* の教室を訪問しました。*Lexer* は所謂昔の äussere Medizin の大家で内臓の手術はあまり行はず、四肢のや整形的手術などが多い様です。男子の兎唇に顯顯有髮部の皮膚有莖瓣を移植したり、陳舊股關節脱臼を觀血的に整復したりするのを見ましたが、教授自身の靜かにムダの無い手の運びにも、助手の機敏な介助振りにも感心しました。茲に一言したいと思ふ事は、だれが手術がうまいとか下手なとかいふ判斷は觀るたびにちがふ事があり得る事です。速い話が同じ頃に他の人が *Lexer* の手術を見た話では、何だかゴテゴテしてゐて甚だ見おとりがしたとの事でした。これは行く先き先きで出會ふ旅行者と談してもよくある事です。滞在期間が短いといふのが原因で、時には全く正反對の判斷が得られるといふ實例です。此處の手術室の構造や室内の氣分は丁度京大外科の手術室のやうな感じを與へられ、臨床講義もよく似てゐます。

次に Orthopaedie の *Lange* の教室を見ました。老 *Lange* には會へずに甥の *Max Lange* に會ひ丁寧なる言葉を得たのですが、老 *Lange* は甥に次の事項をよくきいて置いて呉れとのことでした。日本の子供に Kyphose は多くはないか。女に扁平足は多くはな

いか」と。そこで私は「婦人には確に扁平足は多い、子供には Kyphose が多いかも知れぬ」と答へました。なぜこんなことをきくのかと思ひましたら、彼が「西洋人は子供を脊におはすに前に抱く、その具合で歐洲の小兒に Skolyose が多く、日本人には Kyphose が多い。歐洲人は靴を穿くから Hallux valgus が多く、日本の女は下駄をはくから西洋人に比べて扁平足が多い」と理論づけたいためのやうでした。此教室で取扱ふ患者は古い純整形的のものばかりで、新しい骨折などは扱はず、Mobilisation には「マツサーヂ」を主とし機械運動の装置は僅に二つ三つ位です。「ギプス」縫帶は下に綿を敷かず直接にやつて居ます、これは歐米を通じてそうして居ます。

München の病理學教室は世界一であるとの事です。設備は成る程立派ですが研究は餘り行はれて居ません。猶 München の小兒科にはそれに附屬した外科があります。そこに手腕ある外科學者(正式の Professor ではなく)が居ることを自慢して居ますが、行るのは精々鉗鉗「ヘルニア」の手術位だそうです。

それから Berlin に入り此處を中心としてあちこちと歩きました。Berlin では Bier, Sauerbruch, Mühsam, Braun, Heymann, Borchardt などを訪ねました。

Bier は御承知の様に獨逸外科の大御所ですが、其の教室は全體が下り坂の感を與へました。教授自身は元氣はよいが、醫員學生に緊張味が缺けてゐるやうです。Sauerbruch の教室が緊張してゐるから餘計に目立つたのかも知れません。Bier のところで二つの試験的開腹術、結核性淋巴腺炎、腹壁瘻、「ヘルニア」、食道狹窄症(實際は甲狀腺迷入部の壓迫)等の手術を見ました。鼻から食道上部に通じた金屬「カテーテル」を左頸部へ引き出す手際などは慣れたものです。陳舊な肉芽を搔爬する際大きな焼灼器を用ひたり、大抵の開腹創を primär に閉ぢないで一部 offen にするのは何となく舊式の様に感じました。

Prof. Heymann の處では腦室の「punktion」を二つ見ただけで、手術のある時通知してくれる筈であつたのに旅行したためそのまゝとなりました。

M. Borchardt は元氣に、そして丁寧にやつてゐました。訪問者を親切に歓迎します、廻診をやるからとて患者を一人一人紹介し、自家考案の板製の伸展装置など説明してくれました。之は Berlin 大學の第3外科となつてゐても臨床が主であると思はれます、學生も少く研究も少いのであります。Virchow-Krankenhaus の Mühsam は、Zentralblatt 主幹の Geheim-Rat Borchardt と一緒に日本人會まで出かけて來て私の活動寫眞を見てくれました。一度遊びに來いとのでしたから石山、澤井兩博士等と前以て電話で知らせて置いて行きましたら、患者を集めて置いて手術して見せてくれました〔移動性盲腸、乳癌(電氣手術器使用)其他〕。此病院は昔は有名なものであつたそうですが、今は緊張味があると思へません。病舎の具合は大變日本と似てゐて東京、京都などの帝大病院は全く此眞似をし

たのでせう。

Sauerbruch のところでは醫師、看護婦、小使まで緊張して工場へ入つたやうな感じがす。『一々言ふのは面倒だから書いてあるから見よ！』と言つたやうに色々揭示が出てゐます。中を見てみると面白い。丁度消毒してある機械のところにも行くと、看護婦が怒鳴りつける！ 獨逸の各地からのほか、奥、伊からも參觀者が多い。人の出入りが多いから盜難も從つて頻々とある、私も一回やられました。所で盜難に對しては *Sauerbruch* 自身の手で所持品に各自が氣をつけるべし。どんなになつても當方では責任を持たぬ』と大書してある位の勢です。 *Sauerbruch* 其人は御天氣の具合で訪問者をうるさがつたり親切であつたりするが、教室員には非常に嚴格である。其やる事は手術でも何でも芝居がかりで是れ見よがしの大仕掛であるが、努力する點に於ても非常な精力を以てする。手術の種類も多く、Material も多く、中でも最も多いのはは甲状腺のもの（之はその前に宿題報告をやつた）、數に於てはこれに次いで開腹術であります、胸部の手術は流石に世界で一番多いでせう。Thorakoplastik はほんとうにはやいのです。そのために肋膜も切り、それより infizieren することもよくあるそうです。此手術創は offen にして Drainage をする。『パラフィン』充填術も屢々やつて居るが之も度々 infizieren し、中の『パラフィン』も Fremdekörper となり、そのために駄目になることもあるが、これに就ては彼は何も言はず。横隔膜神経を切ることはあまりやらない、Lungenabscess を切開するのは屢々見た。Fremdkörper のものは見ない。丁度私が滞在中に Oesophagus-divertikel がうまくとれたとのことであつたが、生憎私は休んだのでそれを見ませんでした。

噴門部の癌に對し、下で横隔膜を開き、噴門を剝離して置く豫備手術を行つたが、その際異壓装置を始めと終りとだけに使ふて、非常に靜かにやれる事が得意のやうでした。私が平壓開胸術に依る肺結核手術の活動寫眞を日本から持つて行きましたのは此の Prof. *Sauerbruch* に見せるが主眼でありました。此の術式は日本の學界でも討論され、その際討論の主旨は手術後の感染化膿や後出血などが来るから難かしいといふので、どうも *Sauerbruch* の本に出てゐるのと似てゐるやうに思ふ。それで供覽の際、彼も亦同じ事を主として議論するだらうと豫期して居ましたが、彼は一語もそんな事を言ひませんでした。彼は一番初めに『何故に Pneumolyse をするのか？』と質問しました。その意味は『自分の Thorakoplastik があるのに何でかゝるものをするのか？』といふつもりであつたらしいのです、それから順を追うてまじめに熱心に一々の操作、手術後の経過、死亡率などを聞き、最後に治療日數について聞きましたから『はい時は數週、數ヶ月、おそきは半年以上』と答へましたら、『自分の方法では2週で退院させる事が出来る。それをやつたらどうか？』などとたづねた。*Sauerbruch* は大體實に傲慢な男で、日本の帝大教授にでも氣が向かねば一向

に會はない。其他の米、佛、伊國人或は獨逸の外科學者にでも時には門前拂ひを喰はす位の人ですが、此映畫が彼の繩張りの事であつたからでもありませうか、非常に熱心に學者的に見て居たことは感心すべき事だと思ひます。此供覽に際しては石山博士が非常に熱心に御援助下さつた事を感謝致して居ます。(Sauerbruch 教授使用の「バラフィン」供覽)。

次に旅行をはじめまして、Halle の *Völker* を訪問し、次に Frankfurt am Main の *e. Schmieden* の處を見ました。此處は金のかゝつた大學で建物も立派です。そこでは横隔膜神經に熱湯を浴せて居ました、一時的に機能を下げるつもりでせう。膽石手術後に大きな「タンボン」、*「ドレーン」*を挿入し、下肢の切斷に電氣燃灼器を用ひて居ました。こんな事は首肯出来ない氣がしました。*Schmieden* は若くて溫厚な人で *Sauerbruch* のやうに亂暴でありませぬし、そして實に丁寧です。條理整然たる臨床講義をして居ます。教室員も緊張して居ます。Heidelberg の *Enderlen* の處では大きな手術が行はれてゐる。この人は手術を一つすませると二つ目からは椅子にかけなければならぬ程の大年寄ですが、手を運かすところはすこぶる物凄い位な元氣です。然し教室はここも幾分ダレてゐるやうで、前述 *Bier* の教室のやうに研究的態度が乏しいやうに感じました。

Tübingen の *Kirschner* のところは山奥で、京都近傍で言へば丁度福知山の様で、汽車も度々乗り換へねば行けぬ様な不便な小さい町ですが、大きい大學があるのです。研學に熱心な獨逸の學生は教授を慕うて此片田舎に集まり、而も朝はやく(午前の7時)から講義があるのに講堂に一杯集つてゐるといふ状態です。*Kirschner* は種々新しい事を考案してゐます。色々な装置、手術術式、麻醉法等次ぎ次ぎに新機軸を出して居ます(*Avertin* の靜脈注射、特殊考案の高位腰髓麻醉法、病床附伸展裝置その他)。彼自身も勿論偉いが、獨逸の他の學者や學生が自分の國の誇るべき人として皆が彼を支持し援助して居る事は誠に美しい事で、國全體として學問の進歩する所以であると思ひます。

猶、奥、匈地方から歸りに Breslau で *Küttner*, *Förster* を訪問し、佛、英旅行の歸りに Köln で *Haberer* 教授を訪問いたしました。獨逸全體を通じて、今申した舉國一致といふ風が漲つて居ます。それについて、も一つ目立つと思う事はこれ等の大家は實際手術は上手です。學問上、手術の上手下手など云うべきではありませんが、實際上手です。然るに若い人達は非常に下手であります。同じ年配の日本人に比しますればたしかに下手だと思ひます。そうすると今日大家になつて居る人も前はあんなであつたかと考へると、畢竟そこに材料の豊富さが關係あるものと思はれる。*Poliklinik* は助教授、講師などがする。教授はただ臨床講義をするのみである。それでも患者は多く集まる。それは日本に較べると第1に患者の常識が高く外科手術を理解して居る程度が違ふが、第2に一般醫家が他の醫家を理解して、いつまでも自分の領分でない患者を引きつけて居たり、他人の手腕を傷

つけたりしないで、上手の人のところへ皆もつてゆく。例へば唯我獨尊の *Sauerbruch* の教室を牛耳つて居る *Nissen* でも、自分の先生は別として、*Enderlen* を「手術の神様」だとほめて居る。かくして全體の醫學が進歩して行くわけであり、大家の所へ材料が集まる、それで上手になる所以だと思ひます。

それから *Wien*, *Budapest* へ！

Wien では、鳥瀉先生から承はつて居ましたので、外傷病院へ行きました。骨折が澤山集まつて居ますが、骨片がバラバラになつたので *blutige Operation* でなく舊式の伸展装置だけを用ひ、實に立派に治癒させて居る。治療の前後の X 線寫眞を比べてみると、他に仕掛けがありはしないかと思はれる位上手についでゐる。之はどういふ風に説明すればよいか。勿論醫師の技倆、看護婦の注意等にもよるが、向ふの患者は醫師の命令をよく守るといふ事も關係すると思ふ。一旦命ぜられた *Lage* を忠實に眞面目に守つて辛抱して居る事は感心であります。ここでも「ギブス」繃帶は下に綿を當てずに直接に巻いてゐる。「ギブス」材料は *Berlin* でも使つて居る *Lohmann* (松本博士から聞きました)の「ギブス」に似て居ます。此處の主任は若いし元氣であるが、實になれた人らしく、丁度私が行つてゐる時、顚骨弓の骨折の整復を見せてもらつたが、甚だ迅速、弓の上部に *Jodtink* を一滴つけそこから曲つた骨鈎のやうなものをさし込み、氣合をかけるとカタツとはまつて忽ち整復しました。之も數でうまくなつたのだと思ふ。*Wien* の大學の *Eisersberg* が退職したばかりの際で、其留守部長たる *Breitner* は、日本に捕虜となつて居たらしい噂がありましたが實は露西亞に捕虜となつてそこから日本に来てゐた人で、日本に好感をもち、日本人を歓迎してくれる。當時同地に居られた荻生助教授の紹介で明日手術を見せて頂きたいと電話をかけたら、向ふから私の宿屋へ迎へに来てくれて恐縮しました。單に醫科の者に親切にしてくれるだけでなく、他の科目の日本人をも歓迎するそうです。

それから *Budapest* に行きました。ここでは休暇に入つてゐました。*Prof. Bakay* が「得意なものがあるから見よ」といふ。それは *Antethorakale Oesophagusplastik* で、24例中17例成功してゐる。非常に立派で、私の見た例は良性癰痕性食道狹窄症に對して行はれたもので、前胸部の皮膚でこしらへた食道は、頸の食道部と、腹の胃瘻の處とへうまく連續して居て、コップの水をのませて見ると、頸部下端の針の先のごとき部から僅かに一滴ほど出ただけで、大部分は丁度蛇が蛙をのむやうによく通つて行くのです。

それから前述の様に *Breslau* を經て一旦 *Berlin* にかへり、次に *Schweitz* の *Bern*, *Zürich* へ行きました。之は申上げる事ありません。只 *Bern* の手術室、教室の様子等が京都大學の建築法と似てゐる。内の装置は電氣、瓦斯、水道に新らしい工夫が用ひられてゐるそうですが、休暇でよく知つた人が居ないので、建物を通りぬけて *Kocher* 先生の背

像を見ただけです。Zürich の *Clairmont* 教授は不在でした。

一般に Schweiz, Österreich, Ungarn では「日本人である事が羨ましい、我々の國は衰へたが日本はこれからだ」と、皆のものが言ふ。Budapest では汗が出るのに *Bakay* 教授が話しかける「何とか日本人と親密になる法はないか、助手の交換はせないか？」などと言うて居ました。

それから France に行きましたのは9月の初めで矢張り休暇でした。何處の大學に行つても教授はゐない。夫で *Gosset*, *Marion* 等の教室で助手の人達が手術して居るのを見、*Bergeret* 氏の個人の病院で同氏が胃痛、膽石症、「ヘルニア」、淋巴腺炎など七つばかりつづけさまにやるのを見せてくれた。France で見たものは獨逸とは大變ことなる。小さな消毒罐に器械と材料とを押し込んだのを2つと、寫眞の現像時の「バット」の如きものを準備する、その他には何もない。醫師2人、看護婦1人で「バット」の上に敷布を擴げ、僅かばかりの機械をのせる。機械が足りない時は傍らの棚に並べてある小學生の筆入の如きものの中から1組つつ出して来る。そのかんたんさに驚きました。手術も同様なかんたんさで、手洗も室の隅々に1つある位で看護婦は手を消毒しない。此様に簡略にやる結果、嚴重に無菌的にやれない事になるので、單に胃切除術だけを行つたものでも、腹壁は一部は offen にして「タンボン」を入れて居ます。然し、かくの如くかんたんにも手術の出來るといふ點は御参考になるかと思ふ。斯くかんたんにはやつてゐるが、大切な處は注意深くやつてゐる事は何處でも同じである。それから標本室に行きました。大變綺麗に整頓して並べてある。そして吾々にもよく説明して呉れる。要するに、獨逸の外科が日本のと非常に似て居るのに反し、France ではすべてが簡略に行はれて居る。然し縫帶材料として棉花の代りに紙を用ひるのは獨逸も佛蘭西も共通で、品物は丁度「ナブキン」に用ふる紙の如きものを澤山かさねる、つかんでひきさくとうまくさける。但しこれは其時々經費はやすいが、結局どれ位やすつくつかはわかりません。

9月20日に歐洲を立つて America にわたりました。America から来る報告には直ぐ何千例といつたやうに書いてありますから、多少宣傳的な法螺があるかの如き印象を受けてゐましたので、一般に不眞面目な事をやつて居るのかと想像しましたが、行つて見ると随分眞剣に着實にやつて居ます。*Dandy* の神經の手術などは、靜かに、丁寧な、そして日本人等よりより以上 aseptisch です。面白いと思つたのは、手術衣をきると介助者が不潔な手で脊中の紐をむすぶのはどこでも同じことですが、一つ手術衣を着た上に、もう一つ後から前へ逆にきる。これは袖無し陣羽織のやうなものです。それを術者が消毒した手で自分でとめるのです。之はよろしいと思ふ。特に大手術で混雜の場合などはよろしいと思ひます。獨逸の *Sauerbruch* などの教室などでは見學者にはやかましく云ふ癖に、不潔

な術者背面を平氣で機械臺にふれたりしてゐることと著しい對照です。器械、材料の扱方も亦丁寧です。Pennsylvania 大學の *Frazier* 氏も同じ様な感じがしました。

New York では毎朝七時頃、その日に行ふ各病院の手術についての「ニュース」が來ます。それを檢べて見學に行くのですが私の滯在中にはどうも思はしい手術はありませんでした。精々膝關節の Meniscus の切除位のもので、あまり感心しませんでした。ここは金にかけてあるものゝ研究心は乏しいやうです。

他のところの大學では熱心で、研究室、手術室の様子も一般にまじめです。*Cushing* の教室は、小さく設備は不完全で、むしろきたないところで満足して大手術をやつて居ます。これはまた更に更に慎重な態度で、腦室の腫瘍、小腦の腫瘍などをコツコツ取り出してゐます。電気手術器も使つて居ます。

Mayo-Clinic は皆様の御存じの通り盛です。Rochester には毎朝手術「ニュース」が出るし、Chicago の手術も毎日 Rochester でわかります。Mayo-Clinic では多い時には 1 日に 50—60 位手術がある。行つて見ますと非常にまじめで、芝居じみた事はやりません。消毒も十分です。報告の数がべら棒に多いのですが、行つてみると或は半分位は本當かと思ひます。*Rankin* などは 1 人で午前中に直腸癌を 6 つもやつた日がありました。猶序に附言いたしますが、獨逸人で此 Clinic に專屬して居る宗教家で *Bunge* といふ人があります。獨逸語で親切に案内してくれました。數哩隔てた細菌研究室までも自分の自動車であつて行つてくれます。

要するに、臨床的方面の外科では、歐米を通じて、そんなに驚く程日本と差はありませんが、一般の「レヴェル」が高いのでせう。また研究室での實驗といふのは案外やつて居りません。日本の臨床教室の様に基礎醫學的の事までも澤山やつて居る處は少い様です。其方面はそれぞれの専門の教室へ行つて研究して居ます。*Charité* (*Sauerbruch* の教室) には講師、助手などに何か基礎醫學の専門的智識あるものを採用して居るそうですが、これは一つの面白いやり方だと思ひます。

獨逸では經濟國難で、金については徹底的に疲弊して居りながら、研究はあくまで研究、遊びはどこまでも遊びといふ態度をとつてゐます。コツコツとやる時は決して他を顧みない。全獨逸銀行閉鎖の翌々日に“*Zeppelin*”が北極へ飛びました、北極探検と全銀行閉鎖とは別問題だといふ状態です。尙専門外の事ですが、私は此旅行中に獨逸の銀行閉鎖に遇ひ、また London の *England Bank* が金の兌換を禁止したのにも遭遇しました。其都度旅行者は寄るとさわると皆經濟の話をして居り、其講演會なども各所で開かれたので各國の事情が可なり具體的に耳に入りました。それを綜合して見ると、各國とも熱心に、想像以上に眞剣に、經濟戰を演じてゐるやうに思はれます。遊んで居ると思つた佛國人は却つ

て最も勤儉な國民で、國家のためならどんな醜業もかまわないといふ態度です。金の鳴る New York ですらたとへ金持でも地下室のオデンヤで晝食をすますといふ態度です。普通の「レストラン」などは晝などガラアキです。如何に金をもつてゐても國家のためなら儉約するといふ態度です。日本へは遊ぶ方面と、働かぬ思想とだけが輸入されて、それが時勢だと稱せられて居ますが、歐米ではすでに勤儉力行の時代になつて居るのではありますまいか。國境が遠いので呑氣な事ばかり言つて騒いで居る様ですが、今に立ち遅れはせぬかと思はれます。但しこれは餘談です。

今一つ附言いたします。それは私が母校在勤中に日本各地の外科教室視察旅行にやつて下さつた事が、外國へ行つて非常に参考になりました。既に日本で行はれて居る事を知らないで外國へ行つて感心して歸る事實が澤山あります。實際内地旅行の方が外國へ行くよりも肝要の事だと思ひます。

(以上は昭和6年12月20日 京都帝大樂友會館に於て開催せられたる京都外科集談會席上に於ける教授の歸朝講演を筆記せるものにして、筆責は編輯者にあり)。